令　和　元　年　１　１　月　２　６　日
幼児教育の実践の質向上に関する検討会（第7回）
＜資料2＞

令和元年11月26日　　幼児教育の実践の質向上に関する検討会

外国人幼児の受入れにおける現状と課題について

公益社団法人全国幼児教育研究協会　顧問
岡上　直子

「幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究」
―外国籍等の幼児が在籍する幼稚園の教育上の課題と成果から―
成果報告書（質問紙調査の結果）

【研究の目的】

国際化の進展の中で、日本語指導が必要な外国籍等の幼児（以下、「外国人幼児」）が在園する幼稚園においては、外国人幼児一人一人の言語や文化的背景等、特性に応じた指導の充実を図り、在園する全ての幼児が幼稚園教育要領に則った幼児期にふさわしい教育を享受できるよう良質の教育環境を確保することが重要な課題となっている。そこで、本研究では、外国人幼児の在園状況を把握するとともに、当該幼児とその保護者が抱える課題及び当該園が抱える課題を整理し、各幼稚園の指導上の留意点、当該幼児を取り巻く地域の関係諸機関との連携の在り方や具体的支援策を見いだし、幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容及び方法】

Ⅰ　質問紙調査

調査時期：平成28年10月～11月
調査対象地域
①集住地域（多数・同一国籍型）…群馬、愛知、滋賀
②都市型分散地域（多数・多国籍型）…東京、神奈川、大阪、福岡
③少数地域…岩手
調査１対象園：上記地域内の幼稚園、認定こども園　1,079園
回収率(50.4%)
調査２対象：上記地域の市町村教育委員会(幼児教育担当課) 397教委
回収率(54.7%)
調査内容：
・外国人幼児の在園状況、・外国人幼児及び保護者の園での様子
・都道府県、市区町村担当課の外国人幼児の受入れに関する状況
・外国人幼児等に対する支援　等

Ⅱ　訪問調査　（事例研究）

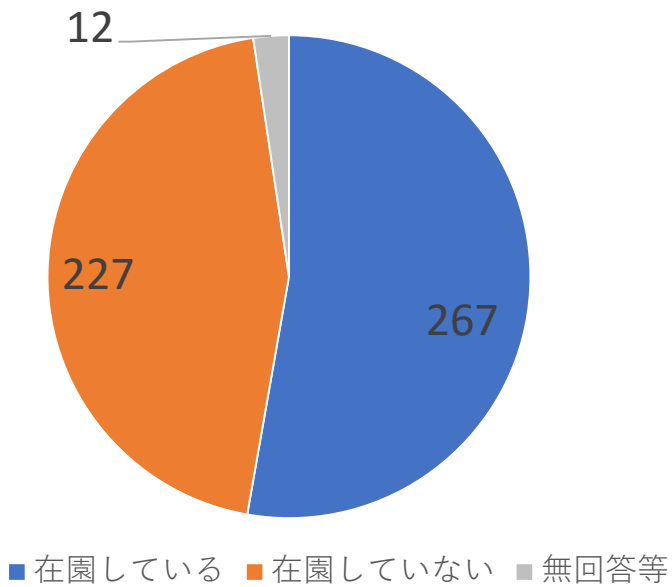
調査時期：平成28年9月～29年3月
調査対象園：質問紙調査対象地域（岩手県を除く）から選定した9園
調査内容：面接調査による聞き取り
（園の概要、地域の実態、入園当初の対象児の様子、保護者の様子、学級の幼児の様子、担任の対応、教員の思いと指導上の留意点、幼児や保護者の課題・困難とその改善策、園が希望することや利用したいこと等）

外国人幼児の在園状況

外国人幼児が在籍する園数の状況

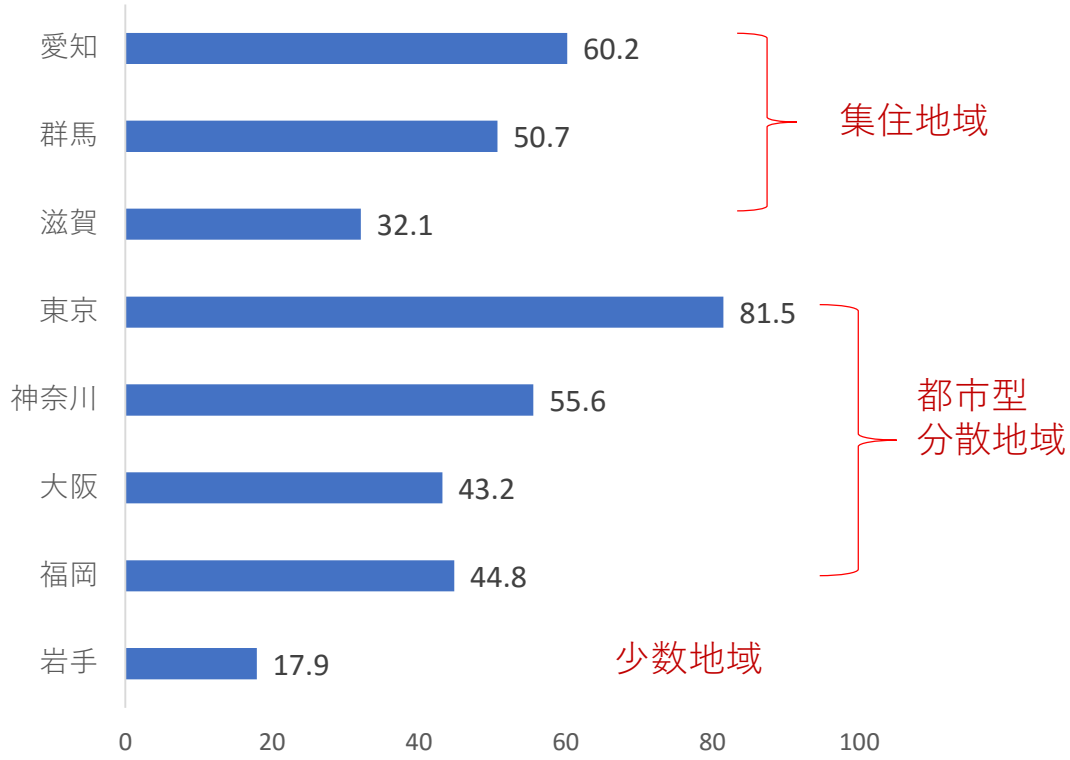
・質問紙調査の回答園は1079園のうち544園（回収率50.4%）。
・そのうち、幼保連携型認定こども園を除く506園を分析対象とする。
・外国人幼児が在籍する園は、267園（有効回答494園の54%）。
・都府県別で、外国人幼児が在籍する割合が高いのは、東京都（81.5%）愛知県（60.2%）、次いで、神奈川県（55.6%）であった。

外国人幼児の在籍園数（回答園全体）



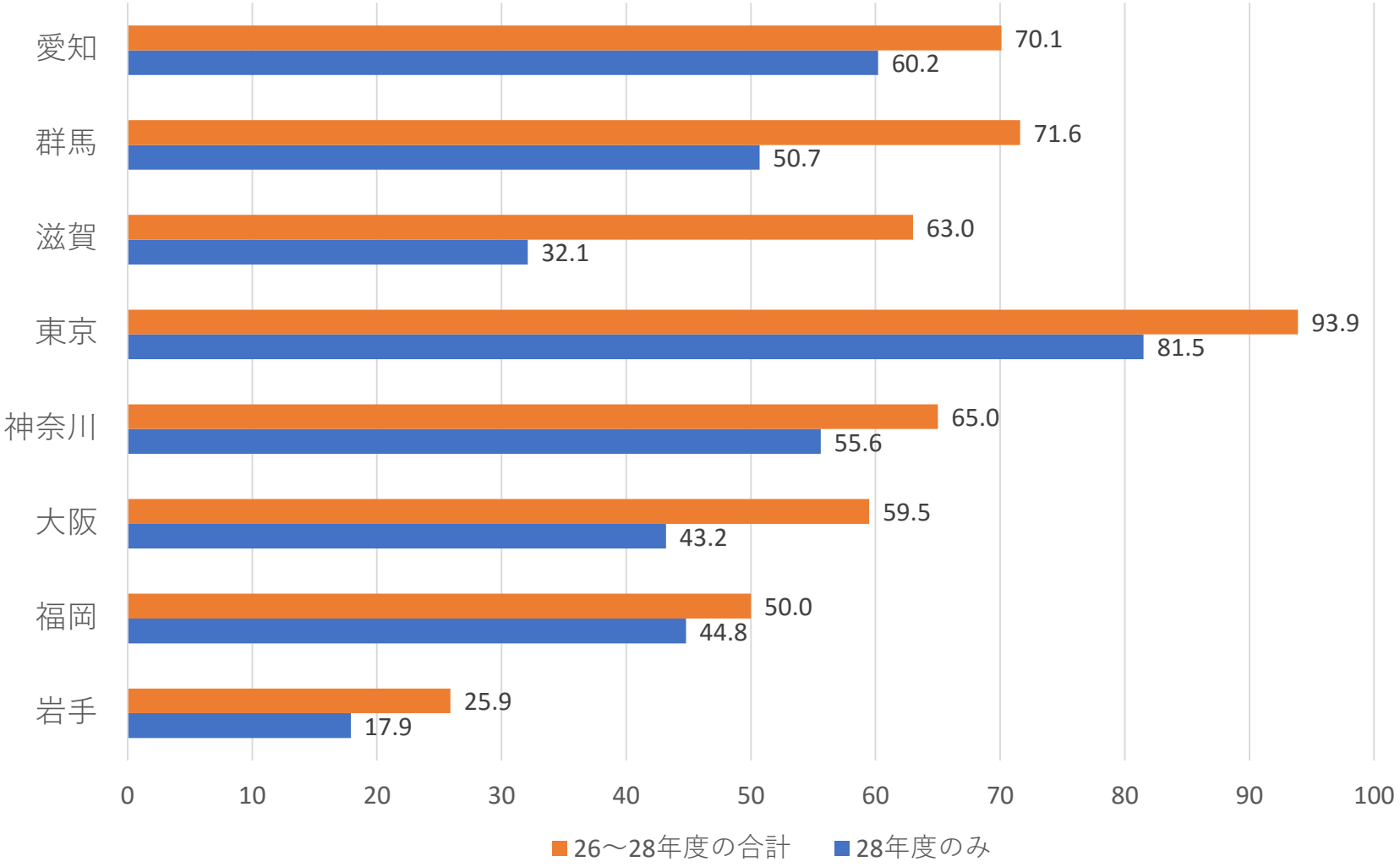
総数：506園

各地域における外国人幼児が在籍する園の割合



外国人幼児の在園状況　（26～28年度の合計との比較）

地域別における外国人幼児が在籍する割合



外国人幼児の在園状況　（28年度）

１園当たりの外国人幼児在籍者の人数及び国数（地域別平均値）

地域	N	平均在籍数（人）	N	平均国数（か国）
愛知	70	3.0	67	2.0
群馬	34	4.2	33	2.4
滋賀	17	3.8	16	1.6
東京	64	6.2	62	3.2
神奈川	43	7.4	39	3.0
大阪	15	2.7	14	1.8
福岡	13	2.5	11	1.7
岩手	4	1.0	4	1.0

最大値　在籍幼児数　59人（神奈川）　　国数　9か国（東京都）

外国人幼児の在園状況　（26～28年度の合計）

１園当たり3年間の外国人幼児在籍者の人数及び国数（地域別平均値）

地域	N	平均在籍数（人）	N	平均国数（か国）
愛知	79	5.5	76	2.6
群馬	43	7.0	43	2.7
滋賀	31	3.2	30	1.7
東京	70	11.5	70	4.1
神奈川	51	11.2	51	3.2
大阪	18	3.9	19	2.5
福岡	15	3.5	15	2.3
岩手	5	2.0	5	1.0

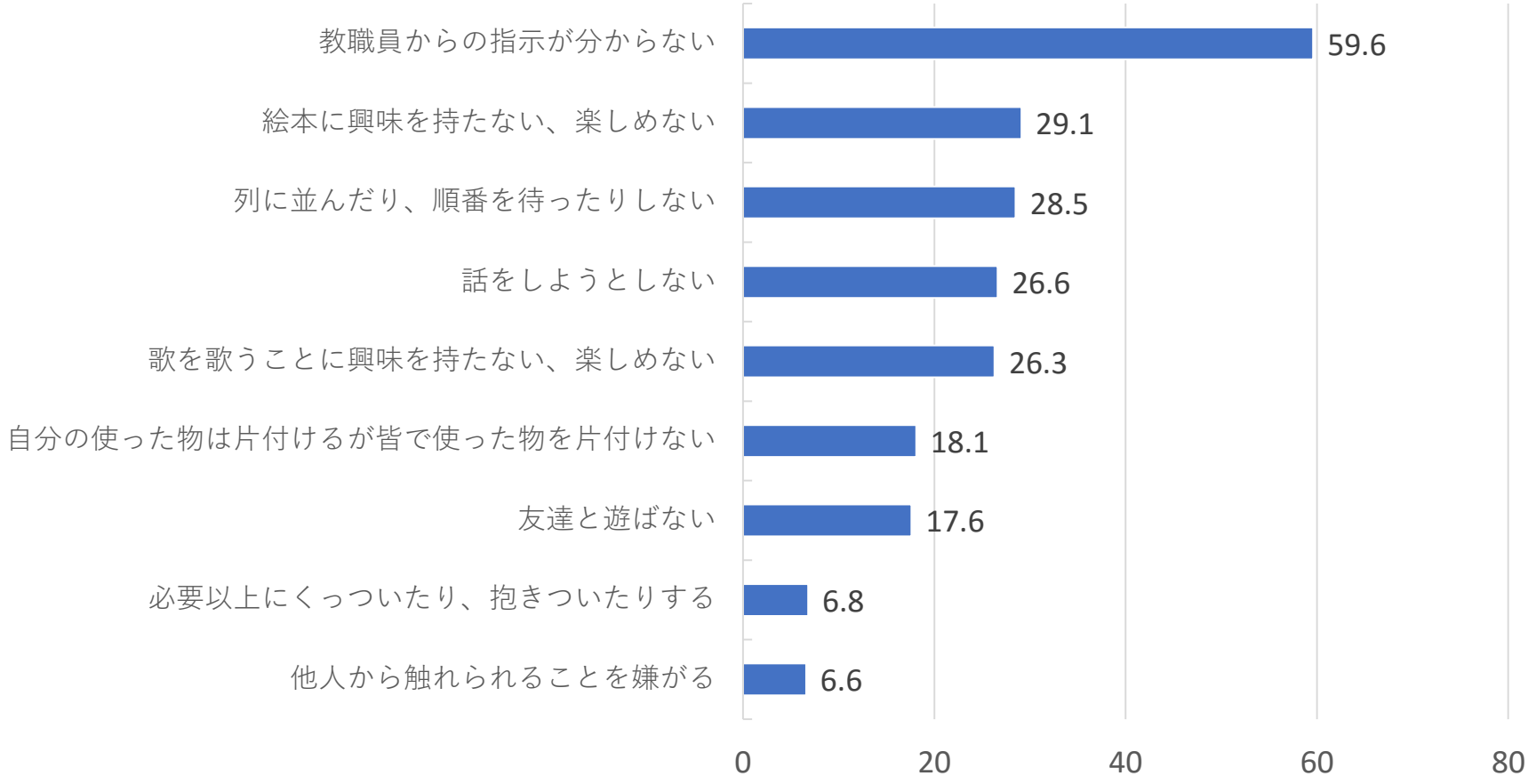
最大値　在籍幼児数　129人（神奈川）　国数12か国（東京都）

外国人幼児の園での様子

入園当初の外国人幼児の姿

教師が最も気になる入園当初の外国人幼児の姿は、
「教職員からの指示が分からない」（59.6%）。

入園当初の気になる姿（「よく見られた」の割合）



≪入園当初の外国人幼児の姿の具体例≫

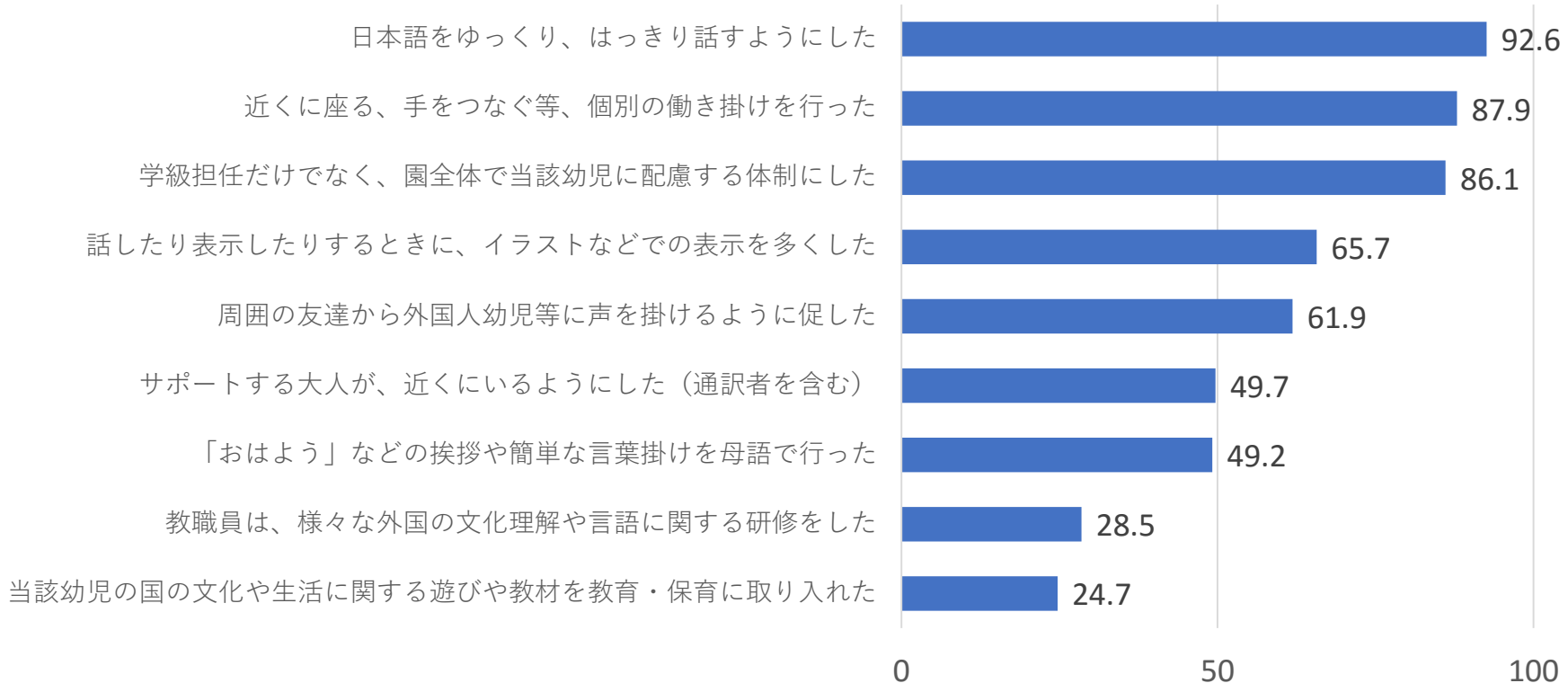
カテゴリー	具体例
言葉の理解、応答	・反応が少なく、理解できたか不明 ・言葉がオウム返し ・言葉が通じないのですぐ手が出る ・話そうとするが伝わらず怒る、母国語で怒って泣く ・同国の子が集まり、母国語で話しかたまってしまう
集団行動・態度	・集団行動の意味が分からない ・話が理解できないので、皆と座っていられない ・友達と積極的に関わるが、相手が嫌がる様子を一緒にふざけていると思ってやめない ・怪我をしても傷を見せたがらず、どのような状況であったかが把握できにくかった
園生活について	・使った物を片付けない、上履き下履きの区別がない ・うがい、手洗い、歯磨き、トイレ後の手洗いをしない ・保護者が幼稚園の生活を理解できず困ったことが多い ・保護者に伝達事項が伝わらず、忘れ物等が多い
食生活について	・弁当を食べない ・日本食が苦手で食べられない ・宗教による食文化の違いがある

外国人幼児の園での様子

外国人幼児に対する指導上の配慮事項

外国人幼児への指導上の配慮事項としては、約９割の園が、日本語をゆっくり、はっきり話す、近くに座る、手をつなぐ等の個別の働き掛け、園全体で当該幼児に配慮する体制づくりなどの配慮を行っている。

（「とても配慮した」「配慮した」の割合）

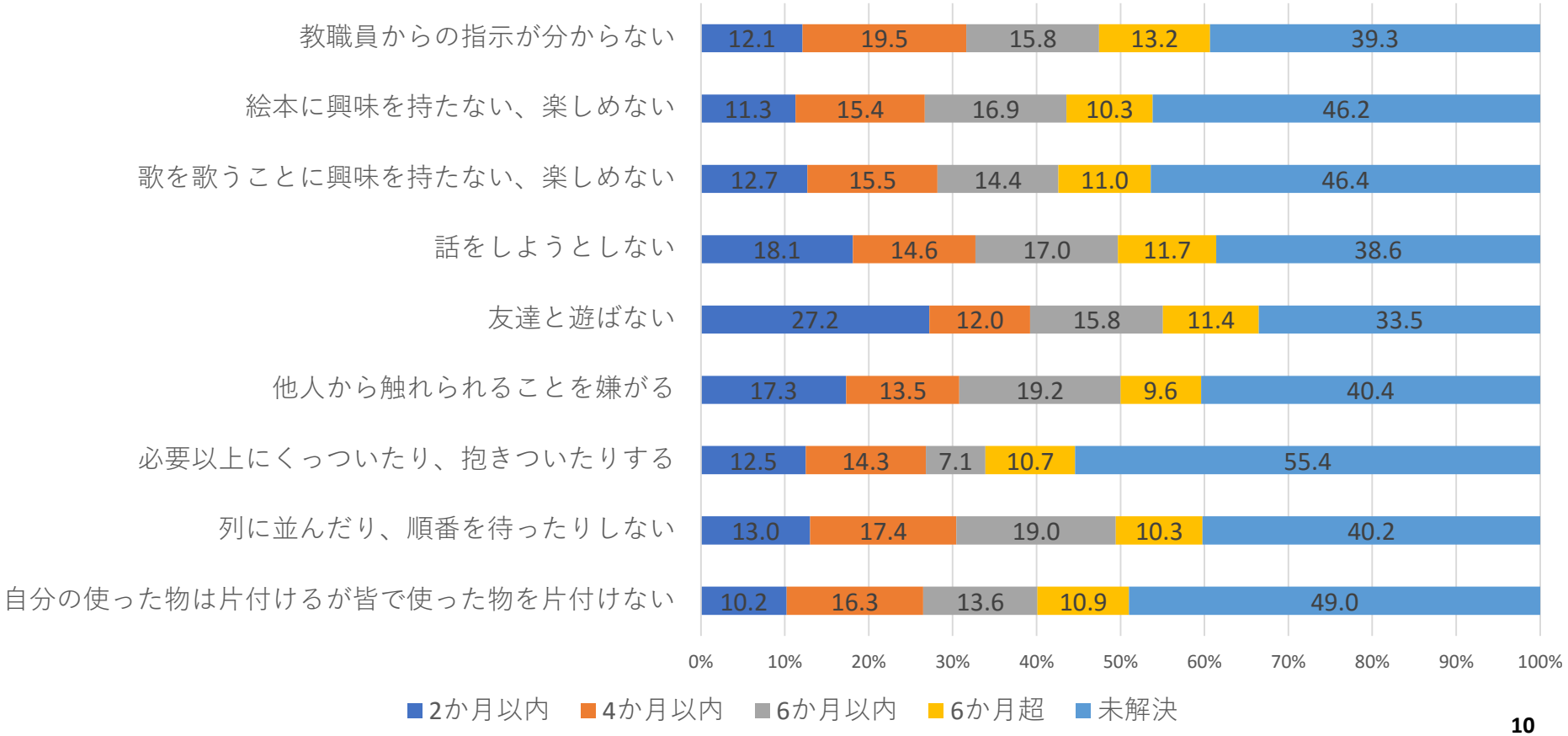


外国人幼児の園での様子

外国人幼児の困り感の解消

入園当初気になった姿は徐々に見られなくなり、約半数が入園から半年くらいすると見られなくなっている。外国人幼児が学級の中で安定してくるのは、概ね入園から半年後以降。

気になる姿が見られなくなった時期



外国人幼児の園での様子

外国人幼児等の困難を解決する指導上の配慮事項

外国人幼児等の困難（「教職員からの指示が分からない」姿）と指導上の配慮事項との関連を見ると、母国の文化や生活に関する遊びや教材を取り入れる、近くに座る、手をつなぐ等、個別の働きかけを行う、イラストなどでの表示を多くするなどの配慮により、気になる姿が比較的早期（入園から２か月以内）に解決する割合が高まっている。

「教職員からの指示が分からない」幼児に対する指導上の配慮と解決の関係

指導上の配慮 ＼ 気になる姿が見られなくなる期間	N	2か月以内	4か月以内	6か月以内	6か月超	未解決
ア.「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	143	10.5	18.9	12.6	13.3	44.8
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	257	12.5	19.8	15.2	13.6	38.9
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	259	12.0	20.1	15.4	13.5	39.0
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	195	12.3	18.5	13.8	11.8	43.6
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	176	10.2	20.5	14.8	11.4	43.2
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳を含む）	146	10.2	19.7	13.6	12.9	43.5
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	246	11.8	19.1	15.0	13.4	40.7
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	82	11.0	19.5	12.2	14.6	42.7
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取り入れた	71	16.9	21.1	11.3	9.9	40.8

外国人幼児等の困難を解決する指導上の配慮事項

「話をしようとしない」幼児に対する指導上の配慮と解決の関係については、
当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を保育に取り入れることや、「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行うことが有効で、2か月以内に解決する割合が高い。しかし、通訳などによるサポートは、外国人幼児が話をするようになるために即効性もある一方で、気になる姿７項目中４項目で未解決率が最も高い。

気になる姿が見られなくなる期間 / 指導上の配慮	N	2か月以内	4か月以内	6か月以内	6か月超	未解決
ア.「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	98	20.4	12.2	16.3	11.2	39.8
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	162	18.5	14.8	16.7	11.7	38.3
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	165	18.8	15.2	16.4	11.5	38.2
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	129	18.6	14.7	17.1	9.3	40.3
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	119	18.5	10.9	20.2	10.9	39.5
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳を含む）	105	19.0	11.4	12.4	10.5	46.7
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	158	19.0	13.3	17.1	11.4	39.2
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	61	13.1	9.8	19.7	16.4	41.0
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取り入れた	53	24.5	13.2	18.9	7.5	35.8

外国人幼児等の困難を解決する指導上の配慮事項

「友達と遊ばない」幼児に対する指導上の配慮と解決の関係

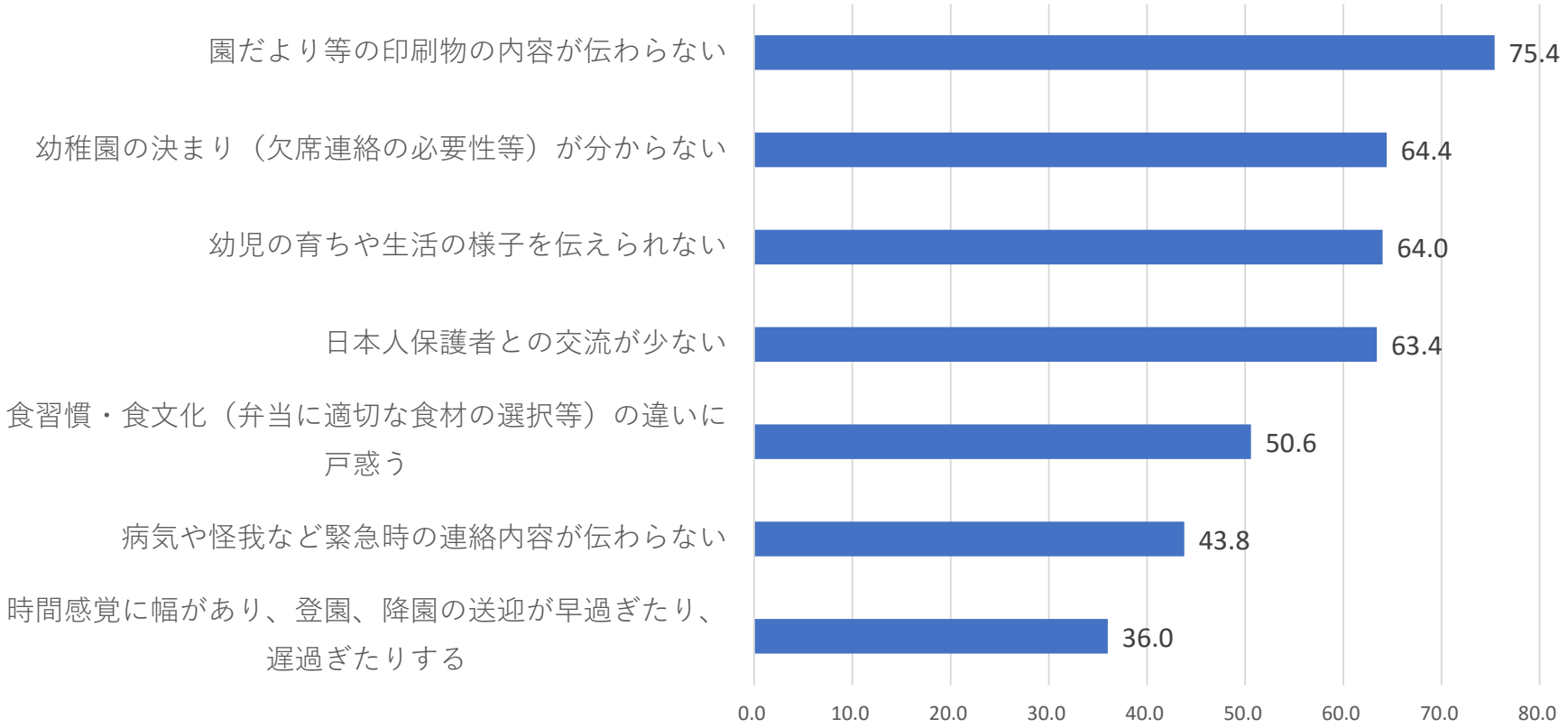
気になる姿が見られなくなる期間 指導上の配慮	N	2か月以内	4か月以内	6か月以内	6か月超	未解決
ア.「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	96	27.1	13.5	10.4	13.5	35.4
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	151	27.2	12.6	15.2	11.3	33.8
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	150	27.3	12.7	14.7	11.3	34.0
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	110	29.1	9.1	13.6	11.8	36.4
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	111	24.3	11.7	18.0	10.8	35.1
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳を含む）	95	24.2	12.6	12.6	11.6	38.9
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	144	28.5	11.1	13.9	11.8	34.7
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	55	27.3	7.3	14.5	14.5	36.4
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取り入れた	48	33.3	10.4	12.5	12.5	31.3

外国人幼児の保護者の様子

保護者の気になる行動

外国人幼児の保護者について教師が気になる行動としては、園だより等の印刷物の内容が伝わらない、園の決まりが分からない、幼児の育ちや生活の様子を伝えられないなど、伝えたいことをうまく伝えられないことに困難を感じている割合が高い。

保護者の気になる行動(「強く感じた」「感じた」)の割合（%）



外国人幼児の保護者の様子

≪保護者の気になる行動の具体例≫

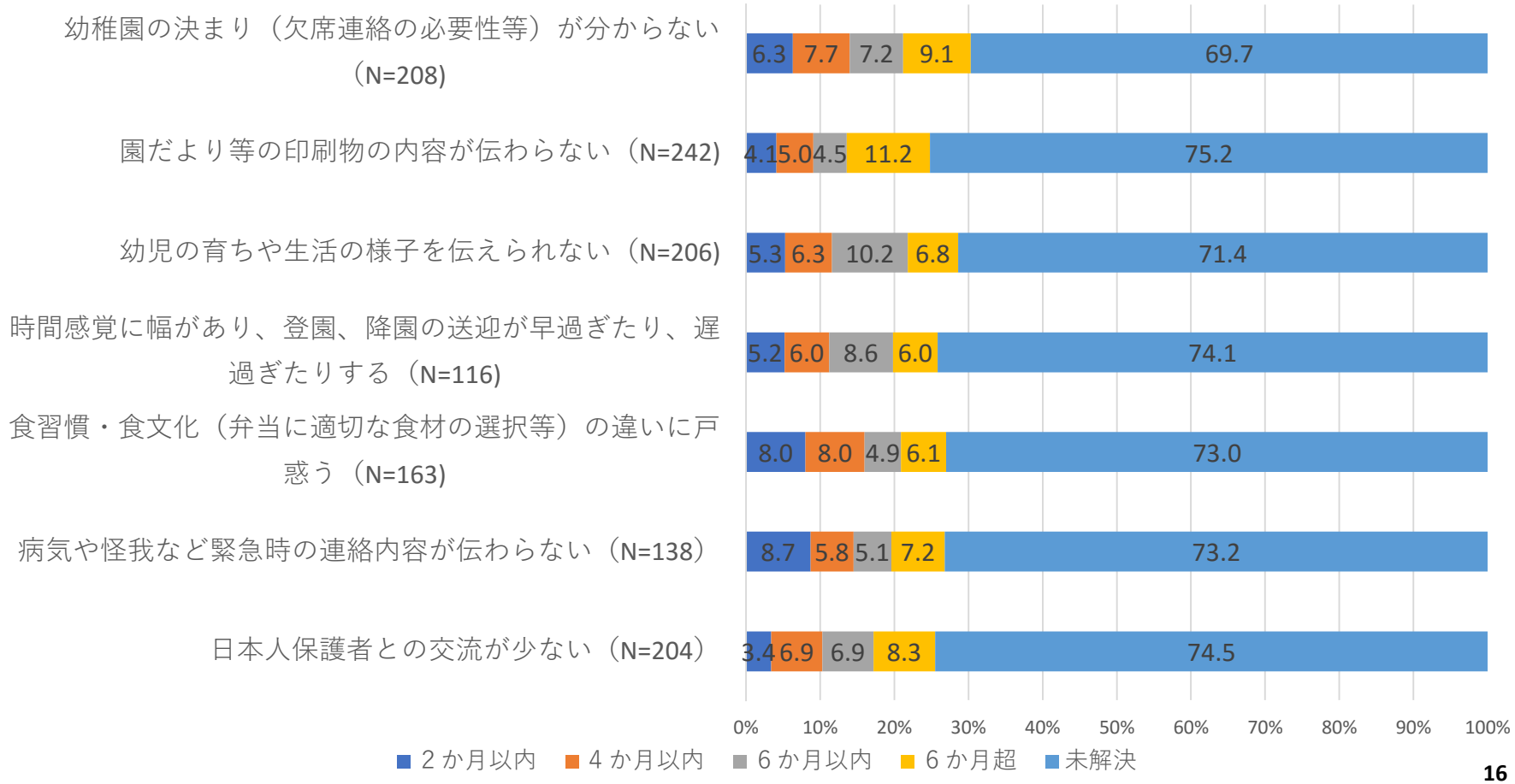
カテゴリー	具体例
保護者への連絡事項	・丁寧に個別に言ったりして対応しないと伝わらない ・休みや遅刻の連絡がない ・日本語特有の言い回しは理解しにくかった ・配布物の理解ができているか連絡を取る必要がある ・保護者自身が園に伝えたいと思っていることが伝わらない ・必要に応じて外国人教師が対応 ・小学校入学に際し、小学校からの説明会のプリントをもとに再度説明し、幼稚園教諭が一緒に確認した
外国人保護者の思いや個別性	・あまり決まりを守ってもらえない ・初めての日本で自分は頑張っていると分かってほしいという主張が多い ・文化の違いを感じている ・３か月ほどで園に来なくなり、全く連絡が取れなくなった
保護者同士の関わり	・他の保護者が積極的に話しかけ等をしてくれた ・母親、子供とともに、日本語は理解するが、母親は他の保護者の中には入らなかった

外国人幼児の保護者の様子

保護者の気になる行動

外国人幼児の保護者について教師が気になる行動は、全ての項目において「未解決」である割合が約７割となっており、保護者に関する困難の解決は難しい。

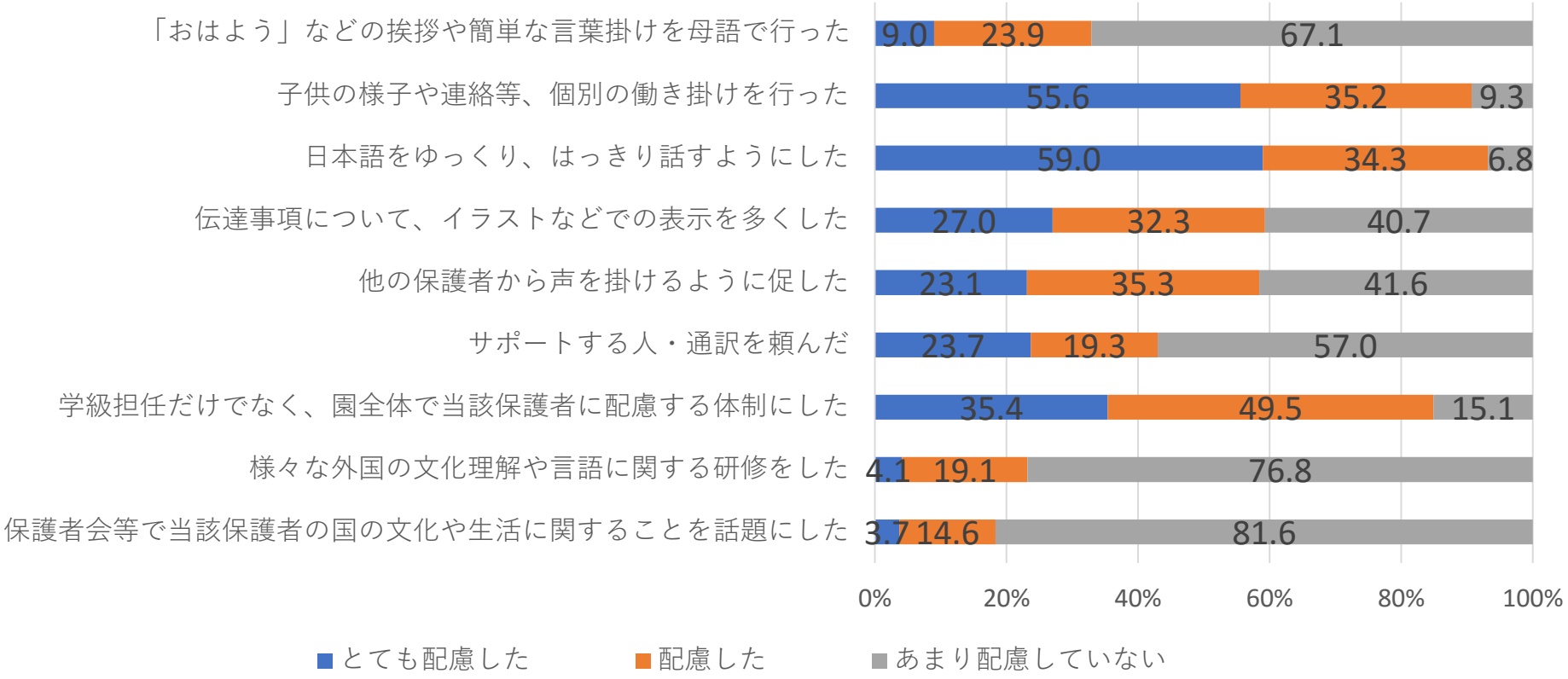
保護者の気になる行動が見られなくなった時期



外国人幼児の保護者の様子

保護者に対する配慮事項

保護者への配慮事項については、「とても配慮した」「配慮した」をあわせると、幼児の様子を個別に伝える、日本語をゆっくり、はっきり話す等が、9割を超えており、担任だけに任せず、園全体で保護者にかかわり、園全体でかかわる配慮も9割に近い。

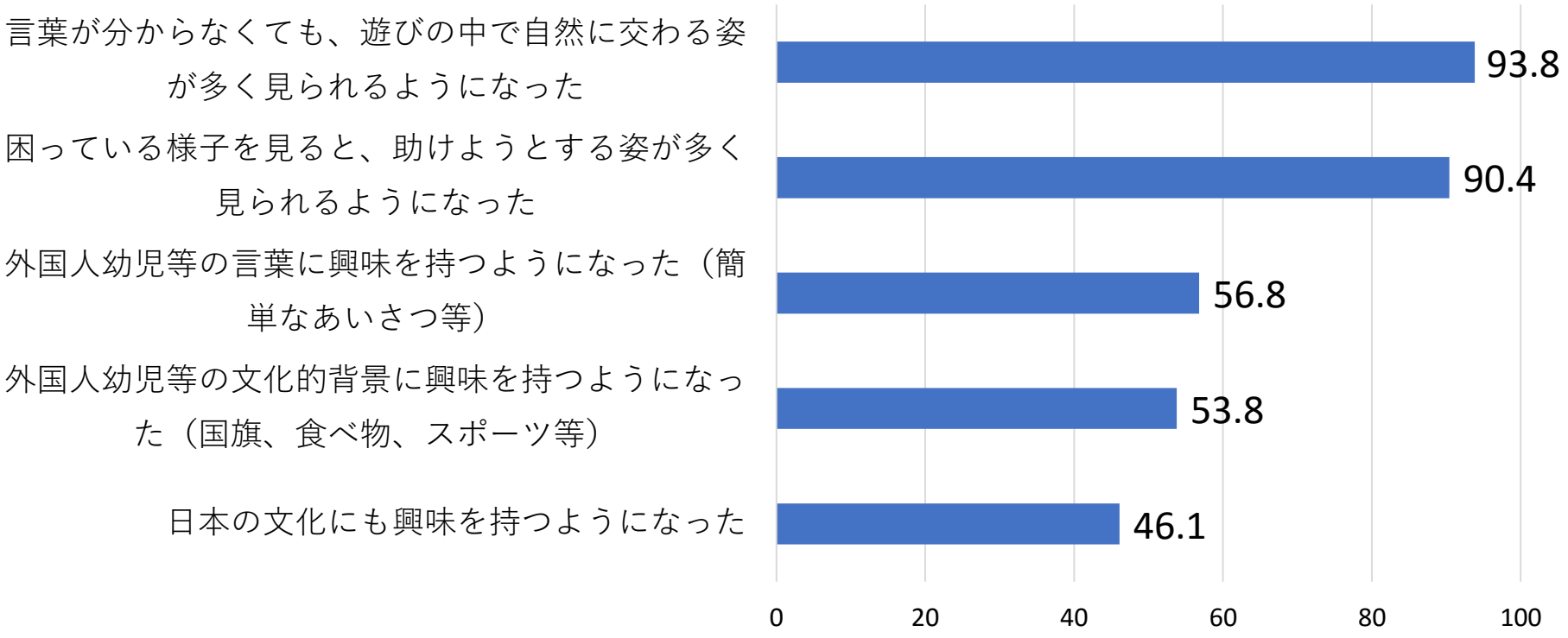


他の幼児への影響

学級の他の幼児の様子

外国人幼児と関わる他の幼児の姿を見ると、言葉が分からなくても遊びの中で自然に交わっていたり、外国人幼児が困っていると助けようとする姿が見られる割合がいずれも９割を超えている。言葉は通じなくても、一緒に遊ぶ中で互いに思いを通じ合わせ、援助性が発揮されているといえる。

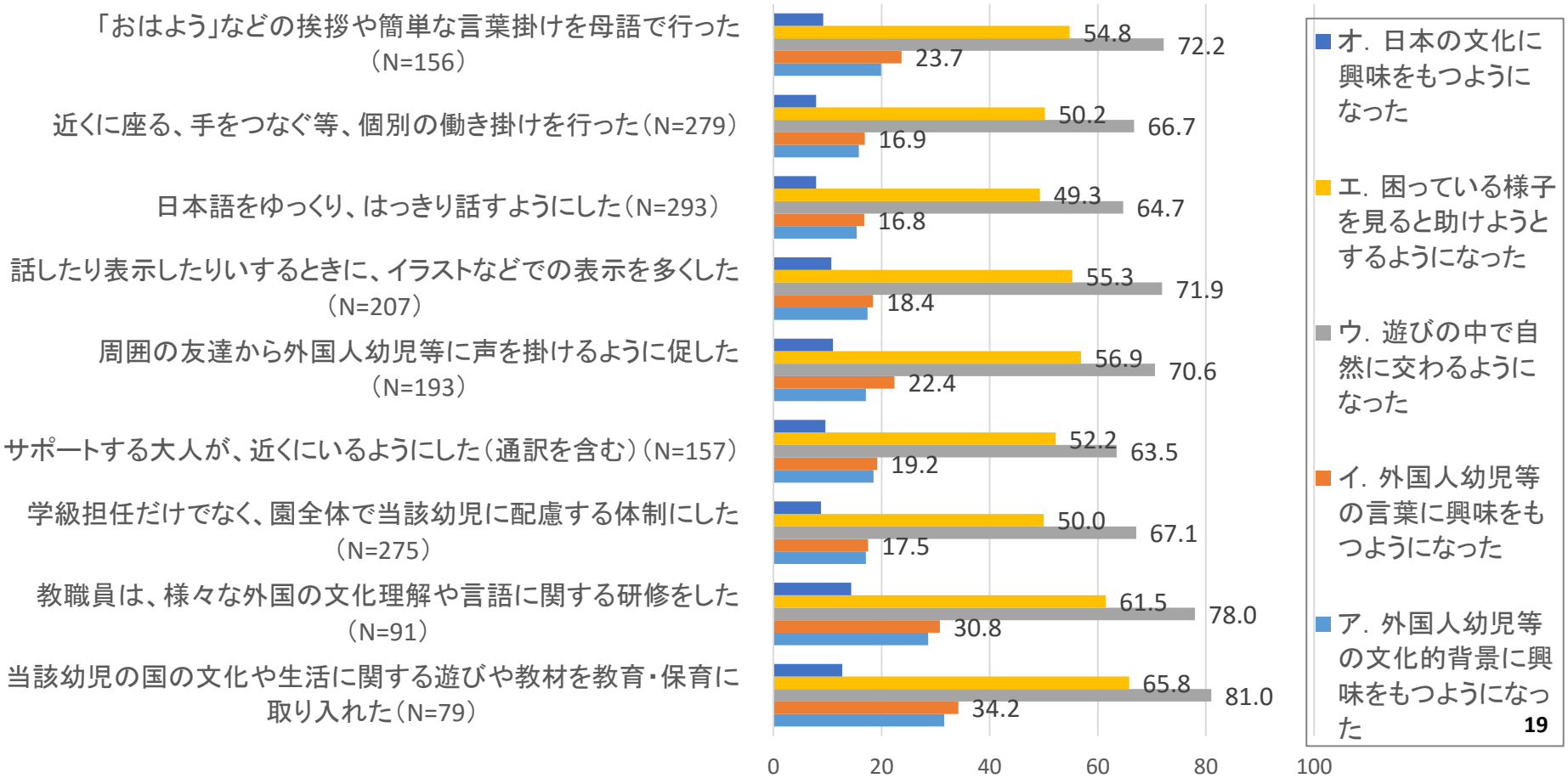
他の幼児への影響（「とても見られた」「見られた」の割合）



他の幼児への影響

指導上の配慮事項と他の幼児への影響の関連

指導上の配慮事項のうち、外国人幼児と関わる他の幼児の変容の割合が高いのは、外国人幼児の母国の文化や生活に関する遊びや教材を取り入れること、様々な外国の文化理解や言語に関する研修を行うこと、あいさつや簡単な言葉掛けを母語で行うことなどであった。教師がこれらのことに配慮することで、学級の中での外国人幼児の受容・援助などにつながるといえる。

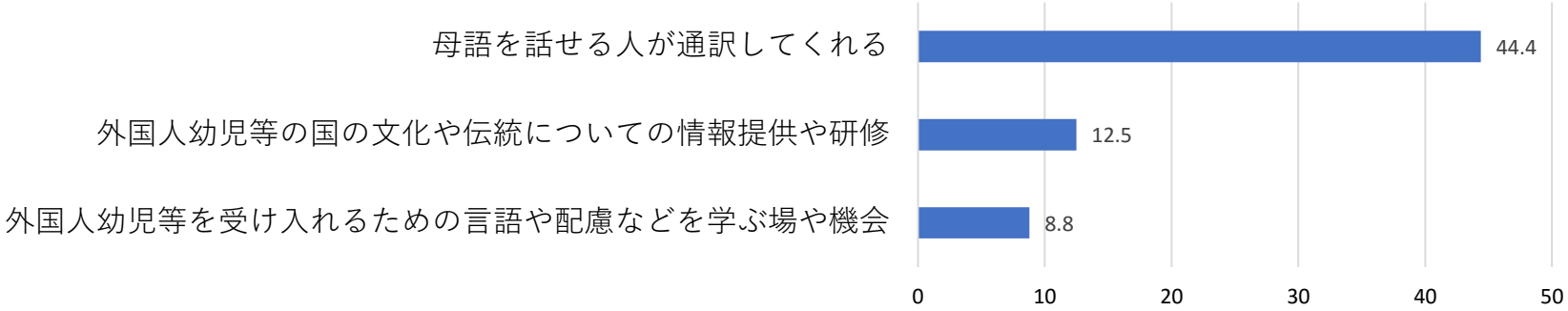


外国人幼児が在籍している幼稚園への支援

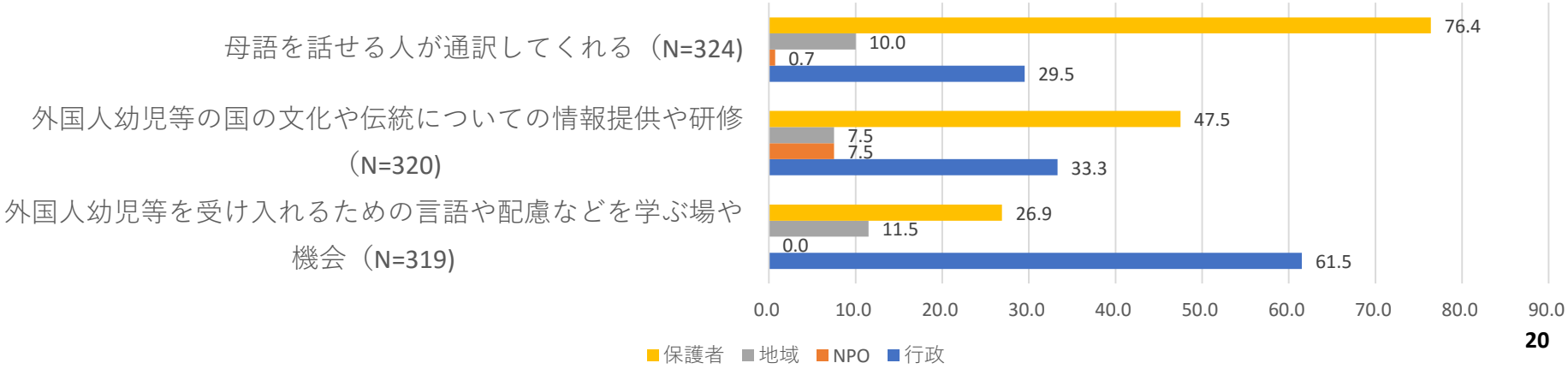
外国人幼児が在籍している幼稚園への支援

外国人幼児が在籍する幼稚園等への支援として多いのは、母語を話せる通訳等による支援である（44.4%）。支援の提供者としては、通訳等は保護者の割合が高く、言語などを学ぶ場や機会の提供は行政の割合が高い。

外国人幼児が在籍している幼稚園への支援



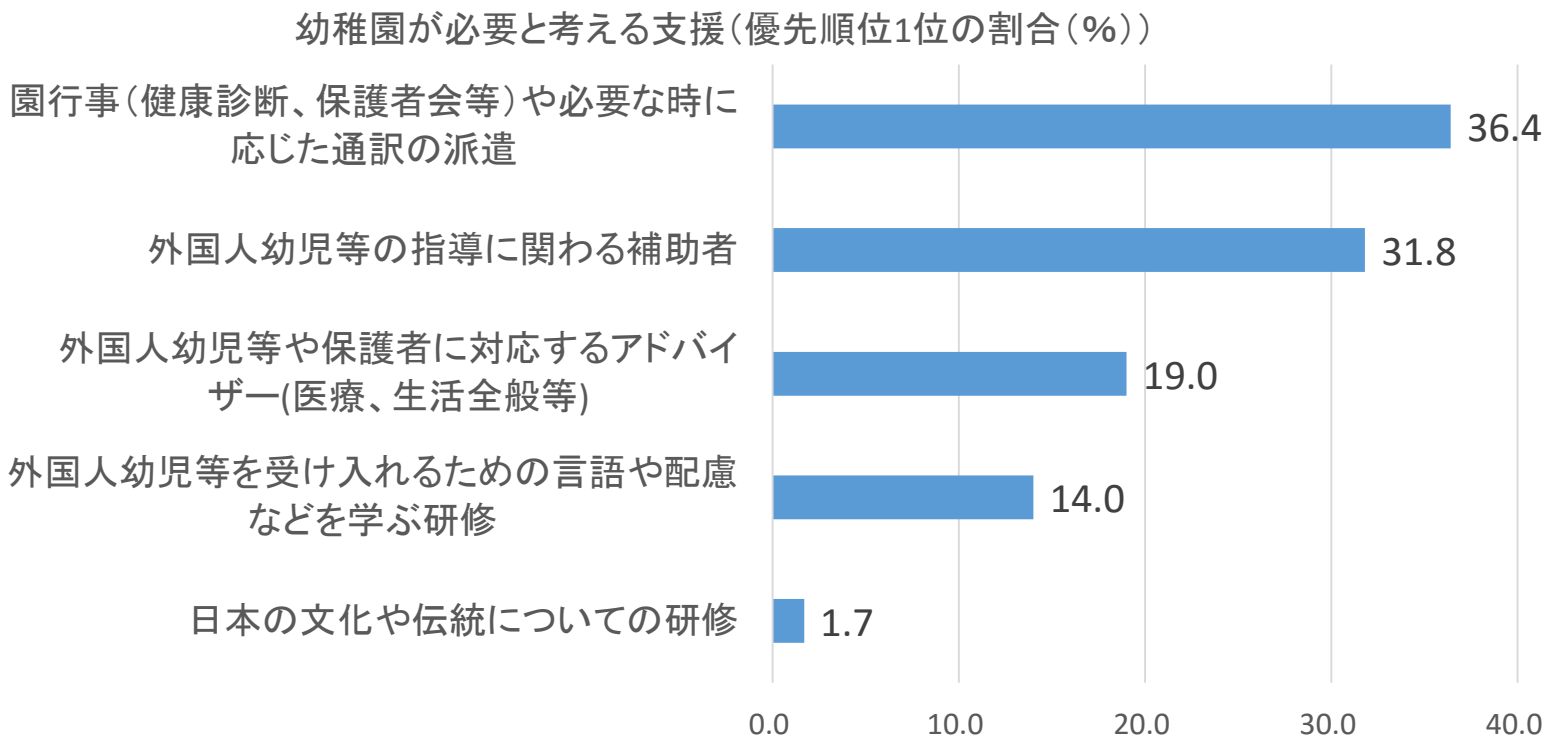
幼稚園への支援の提供者



外国人幼児への支援

幼稚園等が必要と考える支援

幼稚園等が必要と考える支援の優先順位を見ると、園行事（健康診断、保護者会等）や必要な時に応じた通訳の派遣、外国人幼児等の指導に関わる補助者の優先順位が高い。



質問紙調査１（幼稚園対象）の結果①

１）調査対象地域における外国人幼児の状況

① 調査対象地域では、ほとんどの幼稚園等が外国人を受け入れており、２園に１園は外国人幼児が在籍している。

② 調査対象地域では、１園に多様な外国人幼児が在園している。

③ 母語が同じ幼児の在籍率は、集住地域と都市分散地域との差はない。

④ 東京と神奈川の在籍状況は、都市型の典型と考えられる。

２）外国人幼児を受け入れた幼稚園等における指導上の課題と配慮

① 教師が最も気になったこと(困り感)は、幼児に指示が伝わらないこと。

② 気になる度合いは、教師の発達観や期待感に影響される。

③ 半年くらいで、入園当初に気になった姿が概ね見られなくなる。

④ 入園時の年齢が高いほど、気になった姿の未解決率は高い傾向がある。

⑤ 外国人幼児に対するコミュニケーションの工夫は、多様である

⑥ 教師の働きかけと幼児の変容の関係には即効性の高いものと時間のかかるものがある。

質問紙調査１（幼稚園対象）の結果②

３）保護者との関わり

① 教師が最も気になっていることは、保護者に伝わらない困難感である。

② 教師は個別対応や園全体の協力体制によって働き掛けを工夫している。

③ 外国人幼児の保護者の行動は変わりにくい。

４）学級の他の幼児への影響

① 言葉は通じなくても一緒に遊ぶ中で、幼児同士は影響し合っている。

② 外国の文化理解や言語に関する研修は学級の幼児の育ちにつながる有効性が高い。

５）外国人幼児が在園する幼稚園等に対する支援

① 保護者が支援している割合が高いのは、「母語を話せる人が通訳してくれる」「外国人幼児等の国の文化や伝統についての状況提供や研修」である。

② 行政が支援する割合が高いのは、「外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ場や機会」である。

③ 幼稚園等が必要と考える支援の優先順位が高いのは「園行事(健康診断、保護者会等)や必要な時に応じた通訳の派遣」「外国人幼児等の指導に関わる補助者」で、最も低いのは、「日本の文化や伝統についての研修」である。

質問紙調査２（行政対象）の結果

市区町村教育委員会における外国人幼児の在籍状況の把握

・質問紙調査2の回答数は、397市区町村教育委員会のうち217教育委員会（回収率54.7%）。
・外国人幼児の在園状況について、幼稚園では、集住地域は都市型分散地域より把握率が高い。
幼稚園、保育所、認定こども園の把握率を比べると、保育所の把握率が高い。

地域別の在留外国人比率(%)の平均

	集住地域	都市型分散地域	少数地域	合　計
N	64	126	21	211
平均値	2.1	1.8	0.5	1.7
標準偏差	2	2.6	0.3	2.3

外国人幼児の在園数を把握している教育委員会の割合(%)

地域別	幼稚園	保育所	認定こども園
集住地域	57.1(N＝56)	76.6(N＝64)	59.4(N＝32)
都市型分散地域	26.3(N＝118)	35.8(N＝123)	19.3(N＝88)
少数地域	70.6(N＝17)	75.0(N＝20)	66.7(N＝15)
全体	39.3(N＝191)	52.2(N＝207)	34.1(N＝135)

質問紙調査２（行政対象）の結果

外国人幼児や家庭への支援の実施率（%）

項　目	集住地域（N＝67）	都市型分散地域（N＝128）	少数地域（N＝21）	全体（N＝216）
子育てに関する情報(広報誌、HP等)を多言語で紹介している	28.4	32.0	4.8	28.2
就園や子育てについて、外国人専用の相談窓口を設置している	19.4	5.5	0.0	9.3
就園に関する情報案内(園の概要、入園手続きの資料等)を多言語で作成している	35.8	15.6	0.0	20.4
通訳や翻訳等の手助けをするNPO法人等の支援団体を紹介している	22.4	17.2	4.8	17.6

質問紙調査２（行政対象）の結果

外国人幼児在籍する幼稚園等への支援の実施率（%）

項　目		集住地域	都市型分散地域	少数地域	全体
教員を対象に、外国の文化、習慣等を学ぶ研修を実施している	幼稚園	5.4 （N＝56）	6.0 （N＝116）	0.0 （N＝17）	5.3 （N＝189）
	保育所	4.7 （N＝64）	2.5 （N＝121）	0.0 （N＝20）	2.9 （N＝205）
	認定こども園	2.9 （N＝35）	2.3 （N＝86）	0.0 （N＝15）	2.2 （N＝136）
外国人幼児等に対する指導の参考になる資料(指導資料、外国語会話集等)を作成している	幼稚園	1.8 （N＝56）	1.7 （N＝116）	0.0 （N＝17）	1.6 （N＝189）
	保育所	4.7 （N＝64）	3.3 （N＝120）	0.0 （N＝20）	3.4 （N＝204）
	認定こども園	2.9 （N＝56）	2.4 （N＝116）	0.0 （N＝17）	2.2 （N＝189）
園や保育所の要請に応じて外国人幼児等に対応するための教員等の加配を実施している	幼稚園	8.9 （N＝56）	0.0 （N＝116）	0.0 （N＝17）	2.6 （N＝189）
	保育所	9.4 （N＝64）	0.8 （N＝121）	0.0 （N＝20）	3.4 （N＝206）
	認定こども園	5.9 （N＝34）	0.0 （N＝86）	0.0 （N＝15）	1.5 （N＝135）
園や保育所の要請に応じてボランティア等を派遣している	幼稚園	19.6 （N＝56）	12.1 （N＝116）	0.0 （N＝17）	13.2 （N＝189）
	保育所	28.1 （N＝64）	6.6 （N＝121）	0.0 （N＝20）	12.7 （N＝205）
	認定こども園	17.6 （N＝34）	7.0 （N＝86）	0.0 （N＝15）	8.9 （N＝135）
園や保育所の配布物を要請に応じて多言語に翻訳している	幼稚園	26.8 （N＝56）	10.3 （N＝116）	0.0 （N＝17）	14.3 （N＝189）
	保育所	35.9 （N＝64）	12.4 （N＝121）	0.0 （N＝20）	18.5 （N＝205）
	認定こども園	17.6 （N＝34）	9.3 （N＝86）	0.0 （N＝15）	10.4 （N＝135）

質問紙調査２（行政対象）の結果　まとめ

１）外国人幼児の在園状況の把握

外国人幼児の在園状況について、幼稚園では、集住地域は都市型分散地域より把握率が高い。幼稚園、保育所、認定こども園の把握率を比べると、保育所の把握率が高い。

２）外国人幼児や家庭への支援

子育てに関する情報（広報誌、HP等）や就園に関する情報案内を多言語で作成、通訳や翻訳等の手助けをするNPO法人等の支援団体を紹介するなどしている。子育てに関する情報については都市型分散地域の方が高いが、その他は集住地域の方が高い。

３）幼稚園等への支援の内容と実施率

支援は、園や保育所の配布物を多言語に翻訳、通訳ボランティアの派遣、外国の文化・習慣等を学ぶ教員研修、教員等の加配、外国人幼児の指導の参考資料が実施されている。教員研修実施率は都市型分散地域が高いが、その他は集住地域の割合が高い。

４）地域との連携の内容と実施率

行政と地域との連携の実施率は、通訳者の派遣、外国人幼児等の家庭と地域との交流促進、外国人のための医療機関との連携、NPO法人等支援団体の活動の推進、災害等緊急時の対応について外国人対応の連絡窓口設置の順に高い。全ての項目について、集住地域の割合が高い。

訪問調査による事例研究の結果①

調査時期　：平成28年9月～29年3月
調査対象園：質問紙調査対象地域（岩手県を除く）から選定した9園
調査内容　：調査訪問、保育の観察、面接調査による聞き取り
聞き取り内容（園の概要、地域の実態、入園当初の対象児の様子、学級の幼児の様子、担任の対応、教員の思いと指導上の留意点、保護者の様子、幼児や保護者の課題・困難とその改善策、園が希望することや利用したいこと等）

１）事例から明らかになった教師の困り感や課題

① 言葉が不安定になっている幼児への対応に関する教師の困り感が大きい。

② 同じ母語を話す幼児が複数在籍すると、日本語を修得するチャンスが少なくなる。

③ 皆で片付けるという生活習慣の違いが理解されにくい。

④ 自分の思いを表現することに関する課題は、入園する時の年齢によって異なる。

⑤ 保護者は日本語が分からず、幼稚園の生活の決まりに対する理解や協力が得にくい。

訪問調査による事例研究の結果②

２）日本語指導が必要な幼児に対する指導上の留意点

① 外国人幼児が安心感を持てるようにする。

② 幼児が安心して心を開くように、言葉掛けの中に母語を入れてみる。

③ 母語で自己表現してもよいことを感じ取らせる。

④ 通訳等の活用に当たっては、日本語を覚える必要性を持たせていく。

⑤ 通訳等の存在は有効だが、教師との連携を図ることが大切である。

⑥ 幼小の接続の視点から、日本語の理解の程度を確認しておく必要がある。

⑦ 幼児期から遊びや生活の中で、段階的に日本語の指導を行う必要がある。

⑧ 友達とのやり取りができても、日本語が分かっていると思い込むのは危険である。

⑨ 絵カードなど、視聴覚教材があれば分かるという思い込みは注意が必要である。

⑩ わらべうた等、言葉と動作が一致しているものは、言葉を覚えるのに有効である。

⑪ 外国人幼児への関わりは、教師の姿がモデルとなる。

訪問調査による事例研究の結果③

３）日本語指導が必要な幼児の保護者への対応

① 園生活の仕方を知ったり教師とのコミュニケーションをとれるようにする。

② 保護者同士の支え合いを促していく。

③ 保護者の「大丈夫」という言葉には、いろいろなメッセージがある。

④ 時間の感覚は、一人一人異なるものと思って臨む。

⑤ 子どものことについて話す際には、伝え方に気を付けていく。

⑥ その国の文化や風習に関心を寄せていく。

⑦ 多言語のガイドブックを活用する。

外国籍等の幼児が在籍する幼稚園の現状や成果と課題

１）外国籍等の幼児が在籍する幼稚園の現状と成果

① 外国人幼児の在籍は、今後増えることが予想される。

② 教師は、言葉の問題で困ることや気になることを様々な工夫をして解消している。

③ 通訳等の活用は即効性があるが、外国人幼児が自ら話したくなる工夫が必要である。

④ 遊びを通して外国人幼児は安定し、周囲の幼児は多様性を受け止める。

⑤ 多くの協力体制が困難感を乗り越える力になる。

⑥ 外国人幼児の国の言葉や文化を取り入れることは、国際理解教育の基盤を培う

２）今後の課題

① 外国人幼児一人一人の困り感に的確に対応するコミュニケーションツールの開発

② 外国人幼児の就学や今後を見通した母語の尊重と日本語の指導

③ 保護者とのコミュニケーションに関する支援の充実と適切な活用

④ 外国の言葉や文化等を学ぶ研修の機会の充実